

すりかえられた愛とジョージアナの涙

——「瘡」を読む——

小 南 悠

Synopsis: It was shortly after getting married with Sophia when Nathaniel Hawthorne described a newlywed couple and the ruin of its love in “The Birth-mark.” Although the work has been mainly analyzed in terms of Christianity, science, and sexuality, no critic has read the work closely from the viewpoint of love, which Hawthorne was much attracted to at that time. This paper aims to make clear how Aylmer’s love of his wife and of his scientific ambition are described, by paying particular attention to the words “sanguine,” “blight,” “intrude.”

1. はじめに

「瘡 (“The Birth-mark”）」(1843)は、ナサニエル・ホーソーン(Nathaniel Hawthorne) (1804-64)の短編の中でもとりわけ、批評の組上に載せられることが多い。科学技術の進歩という観点からこの作品を論じ、科学に対するホーソーンの警告が読み取れるとする読みや、瘡を消し去りたいというエイルマーの願望を女性のセクシュアリティと結びつける解釈など、その読みは実に多岐にわたる¹。

本稿では、この作品がホーソーン自身の結婚直後に書かれたという点に着目したい(Smith 97; 丹羽 53)。ホーソーンは、この作品を発表する前年の1842年にソファイア・ピーボディ(1809-71)と結婚している。そして、作中でエイルマーとジョージアナが結婚して間もない夫婦であるとされていることも踏まえると、この作品は新婚期の作者によって書かれた新婚期の夫婦の物語とも言えよう。エイルマーたちが生きる時代は科学が急速に進歩していた時代であり、「女性への愛と科学への愛が拮抗することも珍しくなかった」(36)²という。エイルマーは物語の幕開けに先立ち、美しいジ

ジョージアナに求婚し、熱中していた科学研究をもそっちのけで助手に実験室を任せて彼女と結婚した。彼のジョージアナに対する愛が科学研究に対する愛に勝った瞬間であったと言えるだろう。しかし、「最終的に、深遠な学識への愛が人間らしい愛に打ち克った」とある批評家が指摘するように (Stein 91)、物語も結末に近づくとつれ、科学への愛が妻への愛を呑み込み、エイルマーは彼女を死なせてしまう。

彼は妻への愛を見失い、再び科学に傾倒していくわけであるが、その妻に対する愛は、一体どのような過程を経て消散していくのであろうか。エイルマーの愛が変転していく様をテキストから読み取って論じた批評は、これまでに見当たらない。そこで、新婚期の作者によって描かれた2つの愛——エイルマーのジョージアナに対する愛と科学に対する愛——を軸に、この「瘵」という作品を読み直してみたい。

2. エイルマーの二面性

まずはじめに、エイルマーの人物像を考えてみたい。彼は若い頃より助手アマナダブと共に数々の業績をあげ、あらゆる学会から賞賛を浴びてきた。18世紀という舞台設定も相まって錬金術を彷彿とさせるエイルマーの研究は、「高空の雲の領域」(42)や「最深部の鉍脈」(42)、「火山の炎」(42)や「泉の神秘」(42)などが対象であり、雲・鉍脈・火山・泉という言葉からもわかる通り、彼の研究は四大元素説をその背景にしている。そして、この四大元素は、言わずもがな、古代の体液生理学につながる。入子文子は、エイルマーの研究が四大元素の系譜にあるというこの点に着目し、彼を古典的〈メランコリー〉気質の人物として捉えた(入子 205-25)。エイルマーが〈メランコリーの人〉であるという入子の指摘は、彼の口調が「乾いており、冷たい口調 (a dry, cold tone)」(40)であると表現されていることや、彼の実験記録書が「これまで人間の手で書かれたものの中で最も憂鬱なもの (as melancholy a record as ever mortal hand had penned)」(49)と称されていることから、否定の余地がないように思われる。エイルマーの口調

は、〈メランコリー〉症状を引き起こすとされた黒胆汁が乾 (dry)・冷 (cold) の性質を持つという古典的四体液論に一致する上、四大元素説を背景とするこの物語において、エイルマーの記録書に対して “melancholy” という語が付されていることは偶然の一致とは思えないのだから。エイルマーの〈メランコリー〉がその著書に染み込んでいるのだ。以上のことから、エイルマーを〈メランコリーの人〉と捉える入子の説には妥当性があるう。

しかしながら、作品中には、エイルマーが〈メランコリー〉気質とは正反対の気質を持つ人物として描かれている場面がある。それは、ジョージアナが彼の後を追って実験室に忍び込む場面である。この時、彼女の目に映ったエイルマーは次のように描写されている。

彼は死人のように顔面蒼白で、熱心に没頭しており、まるで、今蒸留しているこの液体が永遠の幸福をもたらすひと口となるか、不幸をもたらすひと口となるかは、彼の極度の監視にかかっているかのように、炉の上にかがみこんでいた。ジョージアナを勇気づけるために彼が装ったあの快活で陽気な態度とはなんと違っていたことか！ (How different from the sanguine and joyous mien that he had assumed for Georgiana's encouragement!) (50-51)

ジョージアナが目にしたこの時のエイルマーは、顔面蒼白で実験に没頭しており、その様子はまさに、天才を生み出すと信じられてきた〈メランコリー〉気質を思い起こさせる。そして、この必死の形相とでも言うべきエイルマーの様子は、「ジョージアナを勇気づけるために装ったあの快活で陽気な態度」とは大きく異なっていたとされる。この場面の直前、エイルマーは彼女の寝室を訪れ、実験の成功は間違いないとジョージアナに説いている。この寝室での彼の様子が、この引用箇所では「快活で陽気な態度」と表現されているのだ。

『オックスフォード英語辞典』(*The Oxford English Dictionary*)による

と、“sanguine”という語は「快活な、血の気の多い」という意味を持ち (sanguine, 1, a, 2, b), また体液生理学では“melancholy”と正反対の「多血質」の性質を表す単語でもある (sanguine, 3, a)。ホーソン作品におけるこの語の使用頻度は極めて低く、5つの長編小説ではわずかに2例を数えるのみである (Byers 663)。前述したようにこの物語の背景には四大元素説・四体液論があり、この場面でホーソンがあえて、体液生理学では“melancholy”と対極に位置する“sanguine”という語を使用していることは注目に値する。この箇所に着目した先行研究はほぼ皆無と言ってよく、唯一この語に注釈を施した小山敏三郎曰く、この語は「本文の文脈では(……)一時的な状態を示すもの」であるという (小山 322-23)。エイルマーの一時的な状態を描くためにこの語が使われているのだとしても、単に快活で陽気な様子を描きたいのであれば、〈メランコリー〉気質と矛盾するような語を使用せずとも他にも表現する方法はあったであろう。〈メランコリー〉気質であるはずのエイルマーの様子が、このように“sanguine”と表現されている事実をどう考えればよいのだろうか。

物語を通して、快活なエイルマーが描かれる場面は、先に挙げた実験室での描写以外にもいくつかある。痣の除去を決めた後、エイルマーとジョージアナが初めて実験室に足を踏み入れる物語冒頭の場面はこう描かれる。「彼がジョージアナを実験室の中へ導いた時、彼女は寒気を感じ、震えていた。エイルマーは、彼女を安心させようと、その顔を快活な様子で (cheerfully) 覗き込んだ」(43)。ここで、物語上初めて、陽気なエイルマーの姿が描かれている。そして、妻の顔を覗き見た彼は痣を目にし、震えを抑えることができなくなる。夫の震えを見て失神したジョージアナはそのまま寝室へと運ばれるが、しばらくして意識を取り戻し、痣を見ないでほしいとエイルマーに懇願する。そんな妻をなだめようと、エイルマーは光学現象を実演してみせる。「ジョージアナをなだめ、いわば彼女を現実のものの重荷から解放するために、今エイルマーは、科学から学んだ深遠な知識のうち、軽快で陽気な秘儀 (the light and playful secret) を実践した」(44) というのだ。彼の繰り出す光学現象は「軽快で陽気な」ものであり、この場面でもま

た、快活なイメージが喚起させられると言ってよい。またその後、実験の合間にジョージアナのもとにやってくるエイルマーは、次のように描写される。「研究と科学実験の合間に、彼は顔を赤らめ (flushed)、疲れ切った様子で彼女のもとにやってきたが、彼女の存在に元気づけられたようで (invigorated)、熱のこもった (glowing) 口調でもって自らの技術の才について語ったのだ」(46)。この場面でエイルマーの様子を表している“flushed”, “invigorated”, “glowing”といった語は、〈メランコリーの人〉エイルマーを形容するにはそぐわない。「顔を赤らめた」という表現が血のイメージを彷彿とさせるように、それらはむしろ、多血質の人物にこそ当てはまる。またあるいは、ジョージアナの歌声を聴いたエイルマーは、次のように描かれる。「ここに閉じこもっているのも後少しであり、結果は信頼できるものだと彼女を安心させ、彼は少年のような陽気さを迸らせて (with a boyish exuberance of gaiety) 立ち去った」(50)。“gaiety”という語が用いられていることからわかるように、ここでも、エイルマーの「陽気さ」が描かれている。

これらの描写からわかるように、エイルマーは〈メランコリーの人〉として描かれている一方で、快活な人物として描かれてもいる。これをエイルマーの二面性と言い換えてもよい。ジョージアナがエイルマーの眼前にいる時、彼は陽気な態度で彼女に接する。痣を取り除く実験の最中、〈メランコリーの人〉エイルマーは、妻の前では快活な人物として描かれているのだ。エイルマーはなぜ、ジョージアナの前で快活に振舞うのだろうか。あるいは、そうしたエイルマーの様子を、なぜ語り手は描くのだろうか。

物語が進むにつれて、ジョージアナは、夫が嫌悪する痣に対して自らも嫌悪を深めていく。エイルマーは、そんな彼女をなだめるために陽気な光学現象を見せ、自らの技術力について熱く語る。そして、痣を取り除く実験も成功すること請け合いであると言う。自らの科学力を妻にひけらかし、実験は成功するであろうと語ることで、科学に対する自信を妻に誇示していると言えよう。ここには、妻に自らの不完全性を知られたくないというエイルマーの心理が働いているのかもしれない。実験室に忍び込んできたジョージアナ

に激昂することや、実験の記録書をこっそり読んで彼女をたしなめることから、自分の不完全性を妻から隠したいというエイルマーの心理は窺えよう。そして、この心理の根底にあるもの、つまりは妻の前で彼に自信満々な態度を取らせる心理の根底にあるものは、ジョージアナを安心させたいという気持ちではなからうか。先の引用にあるように、エイルマーが快活な態度を装うのは「ジョージアナを勇気づけるため」であり、妻の顔を陽気に覗き込むのは「彼女を安心させるため」、光学現象を披露したのは「彼女をなだめるため」であった。かつての実験室を美しい寝室に模様替えしたのも、ひとえに実験中の妻を楽しませようとしたからなのかもしれない (Fogle 120-21)。実験の確実性を妻に説き、科学に対する絶対的な自信を見せることで、エイルマーはジョージアナを安心させるために、あえて快活な態度を装っているのだ。実際に、“sanguine” という語には、「快活な、多血質の」という意味の他に、「成功すると自信に満ちた」という語義もある (sanguine, 4, a)。彼が快活な態度を装うのは、自信ある自分の姿を見せることでジョージアナに成功を確信させ、その心を落ち着かせようとするためではなからうか。このように、陽気さを装い、あるがままの自分を見せないエイルマーの姿は、彼の分身とでも言うべきアミナダブが、自然のままの粗野な姿をしている様と実に対照的である。

先の引用で見たように、科学者としてのエイルマーは、常に「顔面蒼白 (pale)」 (42, 50, 53) と形容されている。しかし一方で、エイルマーは、妻の前では「顔面蒼白」な自分を偽り、快活な態度を見せる。そうして、実験が失敗に終わらうる可能性を隠蔽し、彼女を安心させようとする。実験の成功をジョージアナに確信させようとするエイルマーの快活な様が、科学者として苦闘する「顔面蒼白」な様と対置されていると言ってもよい。“sanguine” という語で形容されるエイルマーの様子からは、痣の除去成功を確信させることで、妻の心を徒に波立たせまいとする彼なりの気遣いが垣間見えるのだ。あるいはそうしたエイルマーの心理を語り手がほのめかすのだ。

3. ジョージアナの愛と目的のすりかえ

そうしている間にも、痣を取り除くための実験は着々と進んでいく。結婚後、エイルマーはそれまで気にも留めなかった妻の痣が気になりだし、痣を見るとぞっとするのだと彼女に告げる。その告白にショックを受けたジョージアナは、「ぞっとするですって！（……）それならどうして、私を母のそばから引き離したのですか？あなたをぞっとさせるものを、あなたは愛せないはずです！」(37)と言う。痣という欠点を受け入れてもらえず、この痣がある限り夫が自分を完全に愛してくれることはないと考えたジョージアナは、さらに続ける。「この小さな、小さな痣を取り除けないのでしょうか？あなたご自身の平安のために、そしてまた、あなたの哀れな妻を狂気から救うために、そうすることはあなたの力の及ばないことなのでしょうか？」(41)。エイルマーの心の平穏のためでもあり、自らを狂気から救うためでもある痣の除去を、ジョージアナは夫に提案する。そしてエイルマーはこの懇願を聞き入れる。もちろん、妻の提案に同意する彼の心理には、自然が作り出した不完全なものを完全にしたいという傲慢な近代の人間中心主義が潜んでいることは否めない。しかしながら、エイルマーは元来2人のために痣の除去を決意する。

「あなたには深い学問がおありです！全世界がそれを証明してくれますわ。あなたは偉大な奇跡を為してきたのですよ！」(41)という台詞からもわかる通り、ジョージアナは当初、夫の科学に絶対的な信頼を置いており、小さな痣の除去など有能な科学者たるエイルマーにとっては造作もないことだと考えていた。実験室から遠ざけられている彼女が夫の能力の限界について知らなかったのは、当然と言えば当然とも言える。しかし、物語の進展と共に、ジョージアナは素晴らしい科学の力を手にしているはずの夫の能力の限界を垣間見ることとなる。エイルマーが作り出した魔法のような花は、彼女が触れたことでたちまち枯れる。肖像画を作ろうとしても、出来上がりを見ると彼女の顔はぼやけ、痣だけが鮮明に映り込む始末。そして、エイルマー

の実験記録を読んだジョージアナは、夫の科学に対する信頼を決定的に揺るがされることとなる。「彼の最もすばらしい成功は、目標としていた理想と比べると常に失敗であるということを、彼女は認識せざるをえなかった」(49)とあるように、この実験記録書にはエイルマーのこれまでの失敗が記されていた。そして、「ジョージアナは、読み進めながらエイルマーに尊敬の念を抱き、彼を今まで以上に深く愛するのだったが、彼の判断にこれまでほど全幅の信頼を寄せることができなくなった」(49)。またこの直後、ジョージアナは実験室に忍び込み、先に挙げた引用にある通り、死人のような青白い顔で液体を調合している夫の姿を目撃する。彼女は、普段自分の前では陽気に振舞っている夫がこれまでに行なってきた実験の結末、そしてまるで別人のように血色の悪い彼の姿を目にする。この時、彼女は夫の不完全性を悟ると同時に、痣を取り除くこの実験が失敗に終わりうると気づいたのではなかるうか。

実験室に無断で立ち入ったことで怒る夫に対し、ジョージアナは「あなたこそ妻を信頼していませんわ！」(51)と反駁し、これまでエイルマーが隠してきた実験のリスクを打ち明けるように言う。ここでエイルマーは初めて、痣がジョージアナの命に結びついており、痣を取ることは彼女の死を意味するのだと告げる。2人はこれまで、エイルマーの心の平穩のため、そしてジョージアナを狂気から救うため、つまり2人のために実験を推し進めてきた。しかし、この場面でジョージアナは、痣を取り去ることはすなわち、自らの死を意味するのだとはっきりと知らされるのだ。一方、痣の除去成功は彼女に死をもたらすと同時に、エイルマーの科学力を証明するものでもあった。ジョージアナはこの時、これまで以上に深く夫を愛していた。そして彼女は、愛する夫のために自らの命を差し出す覚悟をするのだ。自分の死を覚悟の上で、実験を続けて欲しいと彼女は言う。エイルマーの能力の限界を知ったジョージアナは2人のために痣を取り除くという当初の目的の不可能性を悟り、その目的を断念し、愛する夫の能力を証明するために自らの命を実験材料として差し出す。つまり、この実験室の場面において、2人のためであったはずの実験がエイルマーの科学力を立証するため、つまりエ

イルマーのためだけの実験に完全にすりかわっているとと言える。

ジョージアナが死を覚悟の上で実験の続行を懇願したことで、エイルマーは彼女の命を犠牲にしてでも痣を消し去ろうと再び実験に取り掛かる。この実験室の場面において、結婚当初勝っていたエイルマーのジョージアナに対する愛が、科学に対する愛に打ち負けるのだ。そもそも、エイルマーの妻への愛が科学への愛に勝るという状況も、それら2つの愛が「絡み合った」(37) 状況下でしか起こりえないことであったという。エイルマーの妻に対する愛は、科学に対する愛があつて初めて成立するものであったということだ。ジョージアナの懇願によって、このバランスが崩壊し、科学への愛が妻への愛を駆逐してしまう。

この時、エイルマーはもはや、痣が消えて平穏を取り戻した自分と妻の姿を夢見てはいない。彼の目には、痣という人間の不完全性の象徴を取り除くことで母なる自然の力を凌駕した自らの勝利しか見えてはいないのだ。かくして、2人のためという目的は打ち捨てられ、自然に対するエイルマーの勝利のために実験は進んでいく。以後、妻の前で見せていたエイルマーの快活な態度は見られなくなり、彼は妻への気遣いを見せることなく、実験への熱に浮かされていく。そしてエイルマーは、妻の存在を顧みず、自らの科学力の証明のためだけに突き進むこととなり、あのフランケンシュタイン博士のように、近代科学の研究に憑かれた狂気の科学者と成り果てる。

4. 愛の行方

妻への愛が科学への愛に駆逐されていく様は、エイルマーの言動を辿ると、より一層明確に見えてくる。ジョージアナの前では陽気な態度を装って彼女を安心させようとしていたエイルマーだが、物語も後半になるにつれ、彼女に対する気遣いは感じられなくなっていく。死を覚悟したジョージアナから実験の続行を懇願された後、エイルマーは再び実験に取り掛かる。出来上がった薬を飲んだジョージアナが眠っている間、彼女を見つめるエイルマーの視線に、夫らしい愛は感じられない。

エイルマーは彼女のそばに腰を下ろし、その全存在が今試されている処置にかかっている人間に相応しい感情で、彼女の顔つきを見ていた。しかしながら、こうした気分には、科学者に特有の学問的探究心も混ざり合っていた。(54)

エイルマーは、ジョージアナの容態を案ずるというよりは、冷静に実験の経過を見つめ、それを記録する。彼女を見つめるエイルマーの視線は、妻を心配する夫の視線というよりむしろ、実験の首尾を観察する科学者の冷たい視線なのだ。

新婚当初の妻に対する愛が、科学に対する愛に取ってかえられたということは、エイルマー自身の発言からも窺える。次の引用は、物語前半部——ジョージアナが死を覚悟する場面まで——のエイルマーの発言である。

(a) 「(……) いいや、愛するジョージアナ (dearest Georgiana), 君は自然の手から完全な姿で生まれてきたのだよ」(37)

(b) 「愛するジョージアナ (Dearest Georgiana), 私はこの問題についてかなり考えてきたんだ」(41)

(c) 「恐れることはない、愛する人よ (dearest)! (……) 私を信じるんだ、ジョージアナ (Georgiana)」(44)

(d) 「(……) 私に向けて歌っておくれ、愛する人よ (dearest)」(50)

エイルマーは事あるごとに“dearest”, “Georgiana”と妻に呼びかける。物語の前半において、“dearest”という呼びかけは実に7回、“Georgiana”という呼びかけも7回を数える。エイルマーの台詞の数から考えると、発言の2回に1回は、妻に対してこれらの語を用いて呼びかけていることになる。新婚期ならではの高揚する気持ちの表れなのかもしれない。しかし、やがてエイルマーの台詞に変化が現れる。物語後半——彼女の命を犠牲にしても痣を消し去ろうと決めてから結末まで——、彼の台詞は約11回、そのうち“dearest”や“Georgiana”といった呼びかけは一度も出てこない。この台詞の変化は、エイルマー自身の心境の変化に伴うものであろう。妻と自分のために実験に取り組んでいる間はまだ、彼女への愛が彼の中から溢れ

出ているようである。しかし、妻を実験材料として実験に邁進していくエイルマーの脳裏に、彼女の存在はない。彼の脳裏には母なる自然を超克する科学力への憧憬しかなく、自分の力の誇示が何にも勝る優先事項なのだ。妻のためでもあった痣の除去が、エイルマーのためだけのものにかわっていることが、この呼びかけの変化に表れている。痣が消えた直後のエイルマーとジョージアナのやり取りは、そのことを端的に示している。痣が消え、眠りから目覚めたジョージアナが「私の可哀そうなエイルマー！」(55)と真っ先に夫のことを気遣うのに対し、エイルマーは「可哀そうだって？とんでもない、この上なく恵まれているんだ！この上なく幸福なのだ！」(55)とし、妻の身を案ずることもなく、痣を除去できた自分を幸せ者と言う。エイルマーは、何よりもまず、自分のことを考えているのだ。

実験の目的がエイルマーの科学力を証明することに完全にすりかわっていることを暗示する描写はこれだけではない。物語中盤、エイルマーは妻をなだめようと、光学現象の実演や肖像画の作製に加えて、花を咲かせてみせる。しかし、その花を摘み取るように言われたジョージアナが触れた途端、花は枯れてしまう。「しかし、ジョージアナがその花に触れるや否や、植物全体が胴枯れ病 (blight) を患い、葉はまるで火に焼かれたかのように真っ黒になってしまった」(45)という。痣という不完全性を持ったジョージアナが触れることで、エイルマーの科学力が生み出した花が胴枯れ病を患うのだ。エイルマーの不完全な科学力が生み出す魔術は、不完全性を象徴する妻の存在がある限り、完璧なものにはなり得ないということが、ここには暗示されている。エイルマーの完璧な科学の力とジョージアナは、共存できない関係にあると言える。枯れた花を見て、エイルマーは「刺激が強すぎたのだ」と「深く (thoughtfully)」(45) 考え込む。妻の存在がある限り実験は失敗に終わろうと考えると彼は、自分の科学に対する障壁となる妻の存在を目の当たりにし、自らの科学を完璧なものにするためにはジョージアナという存在そのものを消すことが必要であると考えたのかもしれない。実験が失敗に終わろうとも、それが科学の勝利に帰結するという逆説が、そうして成立する。

“blight”という語が使用されている場面が物語中にもう1箇所ある。それは、ジョージアナがエイルマーの実験室に無断で足を踏み入れる場面である。実験室に忍び込んできた妻に対し、エイルマーは、「なぜここへ来たのだ？（……）私の努力にその宿命的な痣の不吉な影（the blight of that fatal birth-mark）を投げかけるつもりか？けしからん。去れ、詮索好きな女め！」（51）と言い放つ。エイルマーは自らの実験に「不吉な影（the blight）」を投げかけるジョージアナという存在を忌避するのだ。“blight”という語に定冠詞が付与されていることに注目すれば、この台詞を吐くエイルマーの脳裏をよぎったのは、胴枯れ病に襲われ枯れたあの花ではなかろうか。自分が作り出した花を枯らす作用を持った妻の存在を疎ましく思い、実験室から遠ざけようとしているエイルマーの心理が、ここで前景化されるのだ。妻を「詮索好きな女」と呼ぶエイルマーの台詞からは、夫らしい愛など微塵も感じられない。自らの科学の進歩に不吉な影を投げかけるジョージアナという存在は、エイルマーにとって犠牲にこそすれ、護るべき対象ではなくなっていくのだ。痣を消し去りたいという当初の願望が、痣を持つジョージアナそのものを消し去りたいという無意識的欲望にすりかわっているのだ。

ジョージアナはエイルマーから愛されることを望み、エイルマーも彼女を愛するために痣を取り除こうとした。しかし、物語が展開するにつれ、彼女の存在はエイルマーの科学力を証明するために消すべき対象となっていく。物語中盤、失神したジョージアナが寝室で眠っている際のエイルマーの描写は、その意味で示唆的である。「彼は今、妻のそばに跪き、彼女を熱心に見つめていたが、懸念はなかった。というのも、自分の学問に自信を持っていたし、どんな災いも忍び込めない（no evil might intrude）魔法の輪を彼女の周りに描くことができると感じていたからだ」（44）。妻を災いから護るために自らの科学力を駆使しようとしている彼の思いが読み取れる表現である。ここでは、忍び込んでくるものは災いであり、ジョージアナはそれから護られるべき存在として描かれている。

しかし、この構図は物語が進むにつれて変貌する。物語後半、ジョージア

ナが実験室に入り込む場面を見てみよう。「夫の後を急ぎ、彼女は初めて実験室に足を踏み入れた (*Hastening after her husband, she intruded, for the first time, into the laboratory*)」(50)とあるように、ここでも“intrude”という語が使われているが、ここで“intrude”する主体はジョージアナとなっている。物語中盤では“intrude”してくる災いから護られるべき客体であったジョージアナが、物語後半では“intrude”する主体にかわっているのだ。先に挙げた引用にあるように、「私の努力に痣の不吉な影を投げかけるつもりか？」と吐き捨てるエイルマーが護ろうとしているものは、ジョージアナではなく、自らの科学なのだ。彼は、科学の力という魔方阵の中から、災いをもたらしかねないジョージアナの存在を押し出そうとする。ここで、エイルマーの実験記録を読んだジョージアナが、それを「失敗」(49)と認識している点に注意を向けてもよい。夫の科学実験を「失敗」であると認識できるということはすなわち、彼女が彼の科学を理解しているということを意味する。そうした文脈において考えると、ジョージアナが実験室に足を踏み入れるということは、空間的な侵犯のみならず、知識面での侵犯をも含意しよう。エイルマーの知的立場が、科学を理解できる女性ジョージアナによって侵されるのだ。科学実験に没頭するあまり、本来護るべきはずのものであった妻の存在が、エイルマーの中で、自分の科学のために消し去るべき対象へとになっていく。

エイルマーは最終的に、痣と共にジョージアナという存在をも消し去ることになる。護るべきはずの妻という存在が消し去りたいものになっているとすれば、彼女が息を引き取る際に起こるアミナダブの笑いは、注目に値する。人間の精神性を象徴するエイルマーとは対照的に、アミナダブは人間の世俗性の象徴として描かれている。ジュディス・フェタリーやロバート・ミクラスは、アミナダブをエイルマーから分裂した自我の象徴であり、エイルマーが無意識的に抑圧しようとしているものの表れであると指摘している (*Fetterly 29; Micklus 148-49, 153-54*)。アミナダブがエイルマーの無意識の表象であるならば、ジョージアナが死ぬ際に聞こえるアミナダブの笑いは、一義的にはエイルマーの理想主義を嘲る世俗の冷笑と解釈できるが

(Micklus 157), 自らの科学実験に災いをもたらしかねないジョージアナという存在がいなくなったことに歓喜する, エイルマー自身の笑いであるとも解釈できるのではなかろうか。

エイルマーはジョージアナのためでもあったはずの実験を自分のためだけの実験にすりかえてしまう。そして, 自らを理解し, 愛してくれるジョージアナという存在を顧みず, テレンス・マーティンの言葉を借りるとすれば, 彼女を「目的のための手段」(Martin 95) と見なし, 自らの科学力を証明するためだけに非情な実験を推し進めていく。妻の死を覚悟で実験に取り組んでいる間, 陽気な態度から垣間見えていた彼女への愛は消え去っていき, 彼は科学への愛にひた走っていく。そうした愛のすりかえが, エイルマーを形容する“melancholy”と“sanguine”という体液生理学用語によって一層際立っているのだ。

5. ジョージアナの涙－結びにかえて

自己犠牲も厭わず, 夫に自らの命を差し出すジョージアナだが, そんな彼女が涙を見せる場面が物語中で2箇所だけある。物語の幕開け, 痣に対する嫌悪感をエイルマーから打ち明けられた時に, 彼女は初めて涙を見せる。「『ぞっとするですって, あなた!』とジョージアナは深く傷ついて叫んだ。最初は一時的な怒りに紅潮したが, それから泣き出した (bursting into tears)」(37)。エイルマーが痣を欠点と見なし, あるがままの自分を愛してくれないことに対し, ジョージアナは涙をこぼす。

2度目の涙は物語の後半, エイルマーの実験記録を読む場面で流される。「こうした考えがジョージアナに大いに作用したために, 彼女は開いた書物に顔を押し当てて泣き出した (burst into tears)」(49)。ここでも“burst into tears”という表現が再び使われている。失敗の連続とも言えるエイルマーの実験記録を読んだ彼女は, 彼の志の高さとそれゆえの挫折を知ること, これまで以上に深く彼を愛することとなる。そしてその時, 涙がジョージアナの頬を伝う。

なぜジョージアナは泣くのだろうか。彼女は、エイルマーの実験記録を読むことで、彼の科学への愛に打たれると同時に、彼の科学力もまた不完全なものであり、それゆえに痣を取り除く実験は失敗に終わるかもしれないと悟った。そして彼女は、愛する夫のために、自然の力を凌駕することを目的に据えた彼の実験の材料として、自らの命を進んで差し出す覚悟をする。思い描いたエイルマーから愛を受けるという夢は潰え、夫の科学のために彼女は死を甘んじて受け入れる。かつては夫の愛を得られずに流された涙が、最後は、2人の幸せを諦め、愛する夫1人のために死を良しとし、愛情と絶望という正反対の想いに心を引き裂かれた結果、流されるのだ。

※本稿は、日本ナサニエル・ホーソーン協会関西支部研究会9月例会（2016年9月18日、於・関西学院大学大阪梅田キャンパス）において発表した原稿に、加筆修正を施したものです。

注

¹たとえば、科学との関連はマイルに、セクシュアリティとの関連はクルーズやフェタリー、スミスなどに詳しい。

² Nathaniel Hawthorne, "The Birth-mark." 1843. *Mosses from an Old Manse*. Vol. X of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. William Charvat, et al. (Columbus: Ohio State UP, 1974), 36. 以下、テキストからの引用は全てこの版に拠り、引用末尾の括弧内に頁数を記す。

Works Cited

- Byers, John R., Jr. and James J. Owen. *A Concordance to the Five Novels of Nathaniel Hawthorne*. Vol. II. New York: Garland Publishing, 1979. Print.
- Crews, Frederick. *The Sins of the Fathers: Hawthorne's Psychological Themes*. Berkeley: U of California P, 1989. Print.
- Fetterley, Judith. *The Resisting Reader: A Feminist Approach to American Fiction*. Bloomington: Indiana UP, 1978. Print.
- Fogle, Richard Harter. *Hawthorne's Fiction: The Light & the Dark*. Norman: U of Oklahoma P, 1964. Print.
- Hawthorne, Nathaniel. "The Birth-mark." 1843. *Mosses from an Old Manse*. Vol. X of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. William Charvat, et al. Columbus: Ohio State UP, 1974. 36-56. Print.

- Male, Roy R. *Hawthorne's Tragic Vision*. New York : Norton, 1964. Print.
- Martin, Terence. *Nathaniel Hawthorne*. Revised Ed. Boston : Twayne Publishers, 1983. Print.
- Micklus, Robert. "Hawthorne's Jekyll and Hyde: The Aminadab in Aylmer." *Literature and Psychology* 29 (1979) : 148-59. Print.
- Smith, Allan Gardner Lloyd. *Eve Tempted: Writing and Sexuality in Hawthorne's Fiction*. Totowa, NJ : Barnes and Noble Books, 1984. Print.
- Stein, William Bysshe. *Hawthorne's Faust: A Study of the Devil Archetype*. Gainesville : U of Florida P, 1953. Print.
- 入子文子. 『メランコリーの垂線——ホーソンとメルヴィル』. 大阪 : 関西大学出版部, 2012. Print.
- 小山敏三郎編注. 『詳註ホーソン短篇集 I』. 1973. 東京 : 南雲堂, 1996. Print.
- 丹羽隆昭. 『恐怖の自画像——ホーソンと「許されざる罪」——』. 東京 : 英宝社, 2000. Print.